

ふりかえり



展覧会名：

骨ものがたり ― 環境考古学研究室のお仕事

会期：2019年4月23日〔火〕～6月30日〔日〕（計61日）

会場：奈良文化財研究所 飛鳥資料館

主催：奈良文化財研究所 飛鳥資料館

後援：文化庁、近畿日本鉄道株式会社

来館者数：10,024名（1日平均164名）

開催したイベント

イベント1 「研究員を展示！」

5月10日〔金〕13:30～16:00 @特別展示室／参加人数：380名

5月17日〔金〕13:30～16:00 @特別展示室／参加人数：278名

6月9日〔日〕10:00～11:30 @特別展示室 ○好評につき、追加開催／参加人数：54名

6月21日〔金〕10:00～11:30 @特別展示室 ○好評につき、追加開催／参加人数：30名

イベント2 「体験！研究員のお仕事」

6月9日〔日〕【子供向け】13:30～@講堂／参加人数：94名（第1部：43名／第2部：51名）

6月21日〔金〕【大人向け】13:30～@講堂／参加人数：32名

* 6月9日〔日〕の対象は小学生以上（小学生は保護者同伴）* 各日とも要事前申込・参加無料（要入館料）

来館者の声

来館者アンケートより、印象に残った展示品・コメントを掲載

○部屋全体が研究室の再現になっており見学者も研究員になったつもりで展示を見学できて良かった。素晴らしい体験型の展示だと思う。(20代女性) ○研究のstepについてがイメージしやすく面白かった。(30代女性) ○**人の仕事として面白いと思った。(70代男性)** ○研究室の雰囲気表現していたところ(予定入りのカレンダーなど)。(30代女性) ○壁に掲げられていたパネルや研究に使っておられる道具や骨の標本などから研究の様子がとてもよくわかりました。(40代女性) ○研究員さんの写真パネルとてもリアルでびっくりしました。**まるで研究室におじゃましたみたいでした。** お会いしたかったです。(40代女性) ○予備知識もなく来ましたがその内容が充実していたので大変満足させていただきました。研究員の方々の苦労や喜びが伝わってくるようでした。○標本の数の多さに驚いた。その必要性も説明されてよかった。(70代男性) ○**特にないです。(最高すぎて)(10代女性)** ○研究室をそのまま再現しているみたいな展示がおもしろかった。(30代男性) ○みんなとても面白かった。このような企画そのものが興味深いことでぜひみたいと思ってやってきました。若い研究者の方の熱意やアイデアがわかりうれしかったです。(70代女性) ○研究室の風景が新鮮だった。(30代男性) ○**骨がいっぱいあって楽しかった、でもちょっと怖かった。(10代女性)** ○全て! 現在の展示品の見せ方にとっても驚いた。(70代女性) ○同定用標本の引き出し これ見ても同定なんかできない…すごい。(50代女性) ○**環境考古学という名前を初めて知りました。** 古代の生活を知るうえで重要な研究なのに研究員さんが一人ということにも驚きました。もっと広まればよいと思います頑張ってください。(50代女性) ○「環境考古学」という学問を今回初めて知りました。地道な努力を重ねて同定までの作業をされているのが展示を見て理解できました。研究員も展示されているのも面白かったです。(40代女性) ○想像していたより見ごたえがあり**3時間ほどすごしてしまった。(50代男性)** ○報告書の書き方の説明。(30代女性) ○デスクを使った展示 壁のデザイン。(10代女性) ○シカの下顎骨がずらっと並んでいるところは壮観でした。(40代女性) ○今回の特別展内容や展示方法が斬新で大変興味深く拝見しました。(50代男性) ○**待ってました!の展示でした。** ホネや標本は自然史系ミュージアムで見るので木簡や他分野との連携等報告書までの状況がわかって良かったです。植物での展示も待っています。土壌モノや地形と地名と発掘、また古気象学や太陽活動と考古学もお願いします。(50代女性) ○**引き出しの展示(タブレットとか裏話とか)(40代女性)** ○研究員の裏話 机も懐かしく内容もあるあるで面白い。(40代女性) ○**ムラサキインコ…驚異的な作業に敬服!! (60代男性)** ○出土した骨を細かく分類して保存していること、気が遠くなるような作業ですね。(60代女性) ○骨から当時の生活様式などがわかるというのはすごいと思った。(60代男性) ○地道な取り組みで解明されることに感心した。(60代男性) ○骨からどの動物か! を特定するのはすごいなとおもいました。(60代女性) ○**こんなにがちゃがちゃした壁の展示をみたことがない、** 新鮮だった。(40代女性) ○研究室の書棚がパネルで再現されていたこと。(30代女性) ○日頃の地道な研究に感心します。それにしても骨の小さな部位から動物、魚を特定できるのはすごい! ありがとうございます。(60代女性) ○小貝の標本→あれだけ小さい骨をどうみつけたか不思議。(70代男性) ○**地道な作業によって新しい発見が支えられているのだと初めて知りました。小さいころにこのような展示を見ていたら興味を持つものが変わっていたかもしれません。子供たちがたくさん来てくれるといいですね。(50代女性)** ○とても見やすく特別展に関しては「参考書」の中にいるような感じがして非常に面白かったです。(20代男性) ○研究室をのぞいているようで、何時間でも居たくなる感じでした。環境考古学の中でも動物利用のことをどうやって調べるのか、ぐっと伝わってきました。遺跡から出土した骨から分析次第でこんなにいろんなことを引き出せるんですね。展示のやり方がとても素敵で図録もかっこいい! (50代女性) ○**報告書 それまでの過程もすべてわかりやすくとてもおもしろかった。(40代女性)** ○馬の年齢が歯の長さで分かるのはとてもおもしろいと思った。(10代男性) ○

ハンズオンの展示は、こどもにとって関心を喚起するものでした。大人にとっても新たな発見が多く発信力のある企画でした。○骨は自分が食べて日項目にする物であり、とても楽しくもっと知りたいと思いました。(40代女性) ○**山崎健さんのことTVでやっていてメモして見に来ました。このような研究をする人がもっともっと必要ですね。** ○展示方法、デザインが秀逸でした。(40代女性) ○プロセス1~5と報告書の関連を示したパネル。(40代男性) ○資料の引き出しの画像がおもしろかった。(40代女性) ○展示物がとても見やすく分かりやすいと思いました。こちらの博物館からまたほかの博物館に行ってみたくするような展示でした。またきます。(30代女性) ○**全てですが、所員の方々が小学生に気軽に声かけし、丁寧に説明されていたのがとても良いと思いました。(60代男性)** ○部屋全体のデザインがとても良いとおもいました。○タブレットで色々な標本の中身を見せる展示。(30代男性) ○内容がよかったですだけでなく展示の見た目が良かったです。○各種骨の展示物に気の遠くなるような細かい作業に感動。(70代女性) ○研究の雰囲気の多数の実物、**カレンダーの遊び心もおもしろかった。(40代男性)** ○大きな骨から小さな骨までひとつひとつ無駄なものはないことがよくわかりました。整理整頓大変そうですね。(40代女性) ○楽しかった、**ずっといたかった。(50代女性)** ○とても楽しかった、研究の流れがこまかく展示されているのが分かりやすく楽しい研究員の方のパネル。(50代女性) ○仕事の大変さと重要性をしりました。(60代男性) ○引き出しの中に裏話があるのが良い。全体的にデザイン性がよい。(20代女性) ○**とても良い。もっと若い時に見てたら人生が変わっていたかもしれません。** 研究員の方の仕事の内容、大昔の文献ではない生活感が感じられる展示がおもしろかったです。(40代女性) ○壁面全体を使った雰囲気づくり。(30代男性) ○見てわかりやすいように工夫されていて楽しかった。(50代女性) ○**研究員(人間の)パネル。** ○骨ものがたり 勉強になった。(80代男性) ○研究室の部屋の中をのぞいた気分になれて面白かったです。(40代女性) ○特別展、**ユニークなプレゼンテーションで魅力的でした。** 研究者の皆さんの取り組みがよくわかりました。**息子もこんな風な研究者になってほしい。(40代女性)** ○とても楽しい企画展示でした。たくさんの人に見てもらいたいと思いました。楽しいひと時を過ごせましたありがとうございます。(60代女性) ○特別展がおもしろかった! TV資料ではなく実際に見ることができて感動。 **Officeの様子もリアルで手を伸ばしてしまいそうでした。** 飛鳥寺から研究所にきてその流れがよかった。 **山崎さんのパネルに会えてうれしかった。** 緑あふれる中とても清々しい気持ちになり骨のおもしろさとともに働く皆様のご苦労何よりも生き活きを感じました。 **人は動く=働くことの大切さ喜びを痛感しました。もっと子供たちに知らせたい。(60代女性)** ○イノシシのアゴ標本 入口右側の大型パネルも迫力があつた。これだけの仕事をしているのだと感心させられた。(60代男性) ○展示方法に工夫をされていますが内容がもっと密であるともっと生かされると思います。(40代女性) ○壁のパネルすべて。(30代女性) ○引き出しの上に貝を置いてあってそれを当てるというのが研究している人みたいになれて面白いなどと思いました。(10代男性) ○作業内容の理解しやすさ **デスクや資料の展示が斬新。(20代女性)** ○細かい骨がクリーニングされ分類され保存されていることに驚きました。私なら分類してる途中で面倒になって捨ててしまいそう。あと展示の仕方がポップで良かったです。(40代女性) ○**展示のデザインがおしゃれで良かったです。(30代女性)** ○発掘の状況から分類作業(特別展)の紹介、そして結果(成果)があり、とても説得力がありました。(40代女性) ○ポスターに掲載した骨について紹介されているのが面白く感じました。展示室内のどこでどのようにその骨たちが展示されているのかも書いてくれていてより興味をもって見学することができました。(20代女性) ○骨の分析をしていくのに文字資料だけではなく実際の遺物と結び付けて考察していくのだろうけどものすごい労力忍耐が必要だろうなと思った。(40代女性) ○**雰囲気が好きでした。** ○報告書の展示。考古学の研究のまとめ方が新鮮だった。(男性20代) ○大学で動物考古学を学ぼうとしている私にとって非常に勉強になる特別展でした。骨についてだけでなく、それらに関わる研究者の方々についてもよく分かる展示で、私も骨にまつわる研究がしたい。と今までより強く思わせてくれました。研究の過程で **いつか環境考古学研究室の方々と関わることが出来たらこれ以上ない幸せです。ありがとうございます。**

研究所に寄せられた文化財・博物館関係者の声

飛鳥資料館学芸室や環境考古学研究室に寄せられたメールなどを一部抜粋
※ご本人にご了承を得て掲載しています。

● 限られたスペースを最大限に活用されたスタイリッシュな展示に大変感動しました。当館に帰り、他の職員にも紹介したところ大変好評で、週末に観に行った職員もいたようです。当館でも近頃博物館の役割や仕事などをミニ企画展として紹介をしているところでして、ストーリー性やみせ方など参考にさせていただきたい工夫がたくさんありました。

● 必ずしも広いとは言えないけれど、ちょうどいいとも思えるその展示スペースに、程よく内容が盛り込まれていて、完成度の高さを感じました。何から何まで良くできていたと思うほどの展示に、なんとか伺うことができ、実際に拝見できて良かったです。今年は既に60本ほどの展示を見ましたが、今のところこの展示が一番と言えるかもしれません。もし見逃していたら、一番とも言える訳もなく、やっぱり見れて良かったです。

● 展示や企画・イベント・広報も含めて、今までにないユニークな特別展でまた飛鳥資料館に来たいと思うお客さんが増えるのではと思いました。ぜひこれからも、楽しい展示・企画をお願いいたします！

● 骨ものがたり、こんな展示ができたらいいなあ、と思う展覧会でした。僕も随分前にお仕事紹介系の展示をしたことがあるのですが、泥臭くなりすぎたり資料展示とのバランスがうまく行かなかったなあと反省点がありました。この展示では仕事紹介の展示ストーリーがわかりやすいながらも素敵なデザインも相まって資料にも興味が湧いてしまう。そして個人的には最後の報告書のコーナーがとても惹かれるものでした。そしてみなさんのチームワークとアツさを感じました。

● これまで、いろんな博物館で舞台裏を紹介する展示が試みられ、いくつかの展示にも関わって来ましたが、今回の「骨ものがたり」ほど、研究者と展

示チームが一体となった舞台裏展示は初めて観ました。図録や展示のデザインも斬新で、いやはや、ほんまに観れてよかった貴重な展覧会でした。

● 連休を利用して、関西各地の博物館で開催中の考古系の企画展、特別展を拝見しに行ったのですが、貴館の特別展がいちばん印象に残るものでした。よい特別展を企画していただいたことに感謝します。図録がまたなかなかいいですね。

● 早速スクラッチはがきが話題になっています。これは意表を突かれました。

● 見れば見るほど楽しくていい図録ですね。何といっても写真の多いこと！他の展示の図録を思い出しても、こんなに目で見てわかりやすいものってなかったように思います！ほんと、いい仕事してる！

● 図録も面白いですね。動物考古学としてはもちろんですが、考古学の分野で、これだけ詳細に分析・研究の方法が取り上げられたことはないのではないのでしょうか？骨に関わる人間としては、うれしい限りです。

● お仕事の写真、きっとこれを見て、この道を志す若者が現れると信じます。

● 『骨ものがたり』は、大変美しい図録で、同僚と一緒に見惚れておりました。

● 骨ものがたりは面白いです。なんとか見に行きたいと思っています。動物考古はもちろん、考古学の本当の楽しさを伝え得る良い企画であり、よくここまでと感心してしまいました。

● 従来の展示の概念を破って、動物考古学のおもしろさや重要性が120%示されており、大変楽しめ

骨ものがたり展では、歴史や文化財にあまり接点のない人をターゲットに、わかりやすさを意識して展覧会を作りました。しかし、結果的には一般の方だけではなく、博物館や大学等の研究者や学校の先生などからも多くの反響をいただき、幅広い分野の人楽しんでいただきました。

ると同時に勉強になりました。大切に活用させていただきます。予定は未定ですが、時間を見つけて、展示を拝見したく思っております。

● 骨ものがたり、いいですね！なんというか、奈文研、という組織ではなく動物考古学者の「人柄」がよく伝わる素敵な図録でした。考古学や文化財の社会化というのは、こういう所からはじまるんだろうなぁと痛感した次第です。

● まだ一般的にはなじみがない環境考古学を紹介するには打って付けの図録ですね。また、私の研究分野とも大きくかぶる内容で、今後私が担当する展示企画や図録作成の参考にさせていただきます。

● とても読み応えのある冊子で、しかも構成も写真・レイアウトもすべてが凝っていてオシャレに仕上がっていて、素晴らしいですね。招待状の、スクラッチカードまでセンスがあって、楽しませていただきました。期間中に、ぜひ一度、伺えたらと思っています。

● 内容は、上手にまとめられておられると思いました。動物考古系の方以外にも、この分野を知っていただくのに好著となりますでしょう。お金と時間があるのなら、“全く関係ない若い展示のプロ”と組みながらのものができると是非拝見してみたいと常々夢想しております。

● 斬新な体裁と一般に理解しやすい工夫が随所にあって、さすがと思いました。

● 情報（考え方や分析手法）を見せるという側面が強いけど、展示での文字数はかなり抑えられつつ、言葉は分かりやすい。演出でもフォローしている印象。感覚としては、三次元の図鑑を見ている感じ。面白かったです。

● 「骨ものがたり」展の図録、研究員さんの一ヶ月のスケジュールがカレンダーにしてあるページの「19時まで学童迎え」って文字が飛び飛びに掲載されているのが個人的に胸アツでした。

● すごいなぁ…写真だけでもいい展示って伝わってきます。「一見難しそうなこと」、あるいは「自分たちと関係のなさそうなこと」ほどお客さんとの距離感をぐっと縮めてあげないと伝わらない。でもその実践はなかなか至難のわざです。行ってお話を伺ってみたいになりました。

● 『骨ものがたり』の図録は写真が多く、面白いものになっていると思います。標本作製の写真は見るだけで臭気が漂ってきます。

● 『骨ものがたり』も大変面白く、デザインや写真の見せ方も参考になりました。なかなか奈良まで行ける機会がないのですが、骨ものがたりの展示はぜひとも見たく、なんとか都合をつけるつもりです。

● 良い評判を度々耳にします。うちのかみさんもその一人です。表表紙と裏表紙の関係も好きです。静かで寒そうな現場と無地だけど日だまりに暖かさを感じるラボ裏。

● 図録は斬新な内容とスタイル！展覧会も拝見しましたが、素晴らしい発信と感激いたしました。

● 図録はとても垢抜けていますね。わかりやすく、惹きつけられます。こちらでもさっそく話題になっていました。展示も期間中にぜひ。



「骨ものがたり」ふりかえり

展覧会の企画メンバーに、グラフィックデザイナーの大溝さん、空間デザイナーの小西さんをお招きし、企画段階での思いやこだわりなどについてふりかえりました。

小沼美結 (飛鳥資料館 学芸室 本展主担当)
 西田紀子 (飛鳥資料館 学芸室 本展副担当)
 山崎健 (埋蔵文化財センター 環境考古学研究室)
 飯田ゆりあ (企画調整部 写真室)
 大溝裕 (グラフィックデザイン担当)
 小西愛子 (展示デザイン担当)

展覧会について初めて聞いたとき

西田：私たちとしては、骨ものがたり展は大溝さんにグラフィックデザインをお願いしたいという強い気持ちがありました。最初に企画をお聞きになったときは、どういう印象を持たれましたか？

大溝：たぶん最初はお沼さんからお電話をいただいて、なんか骨の展示みたいなことを伺ったと思うんですけど。電話の時点では、はっきり展覧会の詳細とかよくわかってなかったんですけど、まあなんか小沼さんが必死やというのだけは伝わってきて。

西田：必死さっていうのは、小沼さんの話し方がですか？

大溝：電話でどんなお話を聞いたかよく覚えていないんだけど、一生懸命で必死なんだというのが印象に残っています。僕らデザイナーって、仕事していくうえで、担当者の思いとかそういうものが一番大事というか。今回に限らず美術展と

かでも、自分がその作家や内容を好きとかそんなことはめったにないですよ。めったにないから、展覧会の情報だけ聞いても別にすぐやる気が出るとかはないんですけど、展覧会の担当の人が熱意を持って話してくれることで、まあなんか力になれるんだったらやりたいなとかいう気持ちがどんどん湧いてくるので。

西田：確かに。熱くスタートしてますもんね、最初からね。小西さんは、この骨ものがたり展で初めて仕事をお願いしましたが、最初に企画の詳細を把握されたのは、打ち合せのときでしょうか。

小西：そうですね。企画の内容をちゃんと把握したのは、最初の打ち合わせで、小沼さんやみなさんから展覧会の狙いなどをまとめた資料を直接見させていただいたときですね。普段の仕事でも最初は企画内容を書類でいただいて、初回の打ち合わせで、実際に学芸員さんとか企画担当の方とお会いしてお話を聞くんですけど、学芸員さんが熱意を持って話してくださったことがおもしろいと、それを来館者にどうやったらそのまま見せられるかなっ

て考えますね。ただ、担当の方に熱意がないといえますか「特に思いはないけど、やらないといけないのでやってます」という姿勢だったりすると、相手もしんどいし、私もしんどくなってしまうことがあります。それに比べて、骨ものがたり展では準備時間が少ないなど不安な部分もありましたけど、小沼さんに初めてお会いしたとき、自分のやりたいことを熱く明確に伝えてくれる感じとか、山崎さんやみなさんの人柄を知って、これは絶対大丈夫だろうなって思えました。

仲介者を入れることがわかりやすさにつながる

西田：企画の初期段階では、環境考古学研究室の見せ方をかなり検討しましたよね。展覧会を通して、文化財や歴史に親しみを持ってほしいという狙いは一貫してあったのですが、それを実現させるための手段として「研究の過程」を見せるのか、それとも「研究の成果」を見せるのが等、議論していました。大溝さんと小西さんは、今回の研究室の仕事展示としてかたちにしていこうと、難しさなどをお感じになったりしましたか？

小西：フィールドワークに出た研究員さん目線で研究について紹介するという展示では、研究員さんの似顔絵パネルを設置して、研究員さん自身の言葉で語りかけるっていうのはよくあるんですけど、今回の場合は山崎さん自身の語りではなく、客観的な小沼さんの視点で見た研究員や研究室の姿を見せることを大切にされていたので、私もそこがおもしろいって共感できるところが多かった気がしますね。

西田：小沼さんフィルターが一旦入ることによって、身近さや親しみやすさが出てくる感じでしょうか。

小西：そうですね。どうしても、研究員本人が紹介するかたちですと、「知って知って」という方向になってしまいがちなのですが、小沼さんのフィルターを通すことで、展示を見に来てくれた人へ一方的じゃなくバランス良く伝えられ、私自身すんなり受け入れられたように思いました。図録にしても展示にしても、小沼さんが取材した山崎さんを見せたいというスタンスに筋が通っていることがすごく大事で、山崎さんをただ「骨好きの変な研究員キャラクター」として前面に出していたら、ちょっと違うものになっていたと思います。

研究員自身が展示品になる

西田：学芸室としては、できるだけ素の山崎さんの研究なり人となりを出して、それがかっこよく見せられればいいなと考えていたんですが、山崎さん自身は言わば展示品になってみていかがでしたか？

山崎：研究室を再現することになり、研究員も展示したらおもしろいんじゃないと言ったのは私自身なのですが、正直、文化財や研究成果よりも研究員があまり出しゃばるべきではないという考えはずっと変わらないです。ただ、歴史や文化財などに興味のない人にも広く情報を届けようとする、「古代でこんなことがわかりました」と研究成果を伝える従来のアプローチではダメだと思いました。そこで私自身が前面に出ることで「こんなやつも働いています」っていうことをきっかけに、歴史や文化財に興味を持ってもらえるのならいいかなという感じですかね。今回は、「歴史や文化財に興味のない人にも情報を届けたい」というコンセプトが明確だったし、そこにある小沼さんの思いにとっても共感できたので、私が前に出ることで実現できるのであればと思えました。あと、他の博物館ではでき

ない、多様な研究員が在籍する奈良文化財研究所ならではの展示になったので。私のまわりの人からは「展示パネルになったり、顔写真やスケジュールや本棚をさしたり、ようやったね」って言われるんですけど（笑）。それはもう小沼さんや大溝さんや小西さんを信頼できたっていうのが一番あるのと、あと研究員目線で作ろうとしたら絶対に出てこない発想や視点で展示が作れる気がしたので。結果的に、図録も展示も専門家からの評判がとても良くて、「こういう展示が良かった」や「こういう図録を作りたいかった」っていう声が、今でも私のところに届くので、そういう意味でもやってよかったなあっていうのはありますね。ただ、やっぱり前面に出るのが好きかって言われたら、そうではないんですけど。

大溝：それは、僕もちょっと気にしていて。最初ボスター作るときも「顔写真とかはあんまり入れたくない」とかそういう要望があってもおかしくないっていうのを少し気にしていたんだけど、一切そういうのが出てこなかったんで、もう腹キメてやられてるんだなっていう風には感じましたね。

小沼：山崎さんがすごく腹くつてくださっているっていうのは感じていました（笑）。研究員のスケジュールを載せるときには「お子さんのお迎えとかプライベートなことも全部出すことでリアルな研究員像を伝えたい」とか、ちょっと無理な私のお願いにもほぼ対応してくださって。ただ、これは山崎さんとだからやれるというか、山崎さんも私の狙いをわかってくださっていたからできたと思います。あとは、環境考古学研究室をテーマにした展覧会をやるのなら山崎さんや研究室のスタッフの方など、普段は見えない部分にスポットを当てるのが効果的だと思っただけで、他の研究室だったら、またそこに適した見せ方を探したと思います。

大溝：今回、山崎さんをフューチャーするっていつでも、回顧展のように業績を展示するとかではなくて、山崎さんはあくまで歴史とか研究のきっかけになるような立ち位置で入ってもらったので。そういう意味でも回顧展などと違うし、それが良かったのだと思うんですよね。今こうやって終わってみると、やっぱり考古学のなかでも特に骨ついているすごい専門的な分野で、いきなり展示品なり成果を見せても一般の人にはとっつきにくいので、じゃあ

それに関わっている人（＝研究員）を介在させてやった方がみんなも入りやすいし理解もしやすいんじゃないかなっていうところで、こういうかたちになって、それが結果うまくいったと思いますね。

限られたスペースで展示を作る

山崎：小西さんから見て、今回の展示室のスペース感じてどうでしたか？

小西：はじめは結構狭いなと感じました。今回は、調査研究の過程を順番に紹介するという割とストーリー的な流れがあって、どこからでも好きに見てくださいという自由動線の展示でもないの、最初は細長い展示室で上手く流れが作りにくいなあと思ったんですけど、結果的にはコンパクトに間延びしないサイズでまとまって良かったです。この倍の広さがあつたら、ちょっとどこかが間延びしてきたり、写真ばかりで飽きてきたりとかしたかなと思うので。あと、会場となる特別展示室は、階段を下りてUターンして入るというわかりにくい入口だったので、マグロ模型の展示場所とかも悩みましたね。あと、マグロが想像以上に大きかった。

西田：あのマグロは、小西さんに入っていたく前に、結構こちらで盛り上がっちゃって（笑）。出土した骨から、実際のマグロのスケール感を見せた、わかりやすくしたいという狙いで作ることを最初に決めていたんですよね。私、「あ、もうマグロは発注してるんですか…」って小西さんが言われてたのが印象に残っています（笑）。

小西：最初はマグロ、どうしようかと思ったんですけど（笑）。でも、やっぱりクライアントであるみなさんの要望や条件をどう空間にしていこうというのが私の仕事なので、今回はマグロありきでスペースなど色々検討を進めましたね。

西田：あと、予算が限られている中でもやれることとして、小西さんが壁面グラフィックにタペストリーを使うという案を出してくださったのも私たちにとっては力になりました。

小西：展示グラフィックまで大溝さんが引き受けてくださって、展示空間を盛り上げてくださったので

すごく良かったです。タペストリーを使って、壁面を大きなグラフィックで展開しようという提案をしたものの、図録もちょうど忙しい時期で、大溝さん以外の人がデザインして図録と違う雰囲気になったら、という懸念もあったので、やってもらえて本当に良かったです。

西田：発掘調査報告書を展示したコーナーは、確か、森美術館で「藤子不二雄A展 ―Aの変コレクション―」で、展示品の後ろに漫画のイラストを壁面全体に散らしているのを見て、発掘調査報告書の見せ方に応用できるのでは？と思って、そのお話を最初したんですけど。そこからどういうかたちで報告書の紙面を出したら研究成果を見せられるのかという部分は苦心しましたよね。でも、このコーナーは、来館者の多くが案外立ち止まって読んでくれて、すごく手応えを感じましたね。

小西：とても評判良かったです。私の周りでも。

小沼：この発掘調査報告書の部分は、図録と展示で見せ方を変えているんですね。それぞれの媒体に適したかたちで出すためにどうしたらよいか特に時間をかけて検討したので、好意的な反応が多くて嬉しかったです。

山崎：小西さんは打ち合わせだけでなく、造作とか陳列作業もすべて立ち会ってくださって、しかも、すごく楽しそうにされていた印象があります。

小西：単に展示物が好きなんです。図面上でケースや資料を並べていっても図面での表現の限界があるので、いざ展示するときに細々した調整や、情報共有していたつもりでもお互いわかってなかったことが現場で出てきます。本当はすべての情報が伝わるような図面を書かなきゃいけないんですけど、私が「ここをカッコ良くしたいんです」って言ったら、工務店や造作を担当してくださる展示現場の方たちが補足してくれる。そういう現場でのライブ感というか、作っていく過程が面白いので。

西田：マグロ模型もそうでしたよね。天井に吊るときに、高さどうしようとか、階段を降りてきたときにどう見えるかとかを考えながら、現場で調節しながら最終確認を一緒にしてくださいましたよね。

小西：企画段階で不安だったところって、でき上がった展示でもやっぱりうまくいってないことが多くて。施工の段階になって、どうしても仕方ない、という変更もありますが、その時に自分が立ち会っていたら、なぜそうなったかが分かり対応の仕方もあるんで、できるだけ仕上げまで立ち会って、納得して一緒に作りたいですね。

写真を全面に出す

西田：今回は、図録でも展示でも、わかりやすく情報を伝えるために写真を大切にしました。写真はほとんど飯田さんと小沼さんのペアで撮っていて、二人が撮影した写真は、実はいつもの奈良文化財研究所のスタイルとはちょっと違うのですが、大溝さんがデザインをしていくうえで二人の撮影はどう見えていたんでしょうか？

大溝：どうもなにも、小沼さんは写真一枚とっても、かなりイメージがあるんで、僕の方からは二人にお任せみたいな気持ちでした。ただ、今回この図録も展示も写真をメインに構成できた要因として、やっぱり飯田さん、ひいては奈良文化財研究所の写真室があったというのが大きいと思いますよ。それがなかったらできないと思うんですよ。それこそ、もう僕が展覧会のお話を聞くずっと前から、二人で時間を見つけては色んな研究室に行って写真撮ったりされていたし、それこそ入稿直前で「ここに入れる写真ない？」って聞いたら「じゃあ朝から撮ってきます」と全部用意してくれたじゃないですか。

小沼：今回は、見て楽しい図録とか、視覚的に情報を伝えることを大切にしていたので、写真には本当にこだわって何度も撮影しました。基本的に、飯田さんと私と一緒に撮ってるんですけど、図録の入稿前とか私の方も時間が本当になくなってきて。そういうときは飯田さんに「ごめんなさい、これ撮りに行ってきてもらっていいですか」みたいをお願いすることもありましたね。

飯田：「はいはい」ってね（笑）。

小沼：「これ1カット撮り直し、あ、これも1カット撮り直し」っていうのが五月雨に出てしまったこと

もあったんですけど、飯田さんはそういうことにも全部対応してくれて本当に助かりました。図録に載せる写真は、3月末の入稿直前まで撮ってましたね。今考えても、よくそこまで粘って撮ってたなって思います。大溝さんに「他の仕事ないんですか？二人がずーっと撮ってるから（笑）」って言われたことがあります。

飯田：「暇なの？」みたいなね（笑）。

大溝：でも、そうでなければきてないと思うんですよ。

思いを共有する

西田：あと横で見ていて驚いたし、良かったなと思ったのが、小沼さんと飯田さんが好きな写真と大溝さんの好きな写真が同じなんですよ。それがすごいなと。

大溝：でも僕は、逆に言うと小沼さんが好きなものはわかっているから。

西田：それはクライアントが好きなものがわかるんですか？それとも、小沼さんだからわかりやすいんですか？

大溝：小沼さんは割と好きとか嫌いとかちゃんとはっきりしているじゃないですか。だからわかるんですけど、当然はっきりしてない人とかイメージがない人とか色々いるので。でも僕としては、小沼さんが、「私はもっとカチッとした堅い写真で暗い重厚なのが好きなんです」って言われれば、「じゃあすごい重厚なカタログを作りましょうか」となるだけの話なんですよ、いってみれば。

山崎：最初に表紙案を見たとき、小沼さんと飯田さんから、発掘調査現場の写真を大溝さんが選んでくれた、わかってきているっていう喜びがすごくにじみ出ていたなと横で見ていて感じて。実際、「骨ものがたり」というタイトルで、この現場写真を表紙に持ってくる意外性はすごく評判はいいですけど。

小沼：今回って骨の美しさとか骨のおもしろさを語

っている内容じゃないんですよ。「この骨ってどこから来るの？」っていったら発掘調査で見つかるものだから、現場写真が表紙にすることで、そこから始まっている感じや、環境考古学研究室がある意味っていうのも伝わるんじゃないかなって。でも、この現場の写真は明確に使いたい場所が決まっているわけではなくて、「好きな写真」ってフォルダに入れて大溝さんにお送りして。なので、そこから大溝さんがピンポイントで選んでくれたっていうのに驚いたし、嬉しかったです。

大溝：それまで、小沼さんは散々僕に色々なことを言っていてね、表紙だけのことでなく。僕の方で小沼さんに付度して選んでいるわけでもなく、小沼さんの思いみたいなのをずーっと聞いているから、小沼さんモードになっていくんですよ。写真とかを選んでいても「あ、これだったら小沼さんも好きじゃないかな、いいと思うなあ」ってぐらいのことなんですけどね、たぶん。

西田：それがすごい。さっき、好きなものがわかるってお話があったんですけど、そういうときで大溝さんも好きになるんですか？

大溝：好きになっちゃうんですよ。別に僕は、最初骨に何の興味もないわけじゃないですか。でも、小沼さんがこんだけ好きだ好きだ言っていると、好きになっちゃうんですよ。逆にいうと、今回に限らず好きにならないと仕事にならないですよ。

西田：小西さんも私たちと一緒に仕事をしていくかで、見方が変わった部分はありますか？

小西：そうですね。元々研究の裏側の人達が見えるのは単純におもしろいと感じていましたが、みなさんが熱意を持って話してくださったので、そういう仕事や研究に対する思いをどう展示に生かそうと考えましたし、自分も興味を持って取り組むことで色々なアイデアにつながりました。

思いをかたちにする

西田：私たちが抱いている展示や資料への思いを、大溝さんはどのようにデザインに発展させていくのでしょうか？

大溝：僕はよく言っているんですけど、自分の中に何もないんですよ。何もないというか、空っぽなんです。担当の方から「骨の展覧会をやります」って言われても、「こういうのやりたい」っていうのが自分自身にあるわけじゃないし。なので、打ち合えるに行くときの感じとしては、空っぽのバケツの中に、今回だと小沼さん西田さん山崎さんの思いみたいなものとか色々なもの入れてもらって、それをかき混ぜてそこから大事なものとかないかなっていうふうにつくっていくので。逆にいうと、担当者や企画する側の人がなんか言葉にはできないんだけどもやもやしていることや、相談しているうちに違うと感じたこととかは、どんどん言ってもらわないと僕は何もできないという感じですかね。

山崎：大溝さんは、コミュニケーション能力がすごいなって一緒にお仕事させていただいてずっと感じていて。デザイナーさん自身がこうしたいじゃなくて、こちら側がどういうことを求めているのか、どういう展示にしたいのかって部分をまずちゃんと受け止めてくれて。でも、受け止めるだけじゃなくてそれをふまえて、コンセプトとかやりたいことを一緒に考えてくださったので、そういうやり取りがとても楽しかったです。

大溝：僕にしてみれば、自分がコミュニケーション能力が高いとは思ってなくて。僕は色々な人と仕事するけれど、相手次第なんですよ。だから、今回の小沼さんみたいに「こういうのがしたい。私これが好き。山崎さんをつよく見せたい」と、どんどん言ってくれる人もいれば、ほんとに形式ばった当たり前のこと以上のことは、その人自身が気持ちがないのかよくわからないけど、いくら聞いても伝わってこない仕事もあるにはあるので。だから僕がどうのこうのっていうよりも、そこは相手次第かなといつもそう思っています。

西田：相手とちゃんとキャッチボールができると、大溝さん自身もどんどんデザインをかたちにしていけるし、逆に相手とのやりとりがないとそこから発展せずに終わってしまうんですね。

大溝：僕いつも言っているんですけど、やっぱり「好き」っていうのが大切なんじゃないかなと。小沼さんにしても、環境考古学研究室がおもしろいとか、社会的意義があるとか色々考えているとは思うん

ですけど、でもやっぱりそれよりも「私はこれが好きなんだ」っていうことを一番根っこというか中心においてやられているってことを一番強く感じたし、大切なことなんじゃないかなと思いますね。逆にデザイナーにお仕事頼んだら、なんかかっこいいものができて来るんだろうと思っている人がそれなりにいるんですよ、やっぱり。でも、それは僕すごい困るんですよ。だからいつも「僕なんにもないですよ、空っぽですから」って。

山崎：それで相手の思いや話を引き出すんですね。

大溝：そう、聞かないと、っていうのがあるし。結局デザインってなんの役割かっていうと、翻訳みたいなことだと思うんですよ。誰でもそうですけど、自分の仕事には言いたいこといっぱいあるわけですよ。その伝えたいことは全部自分たちでわかっているから、展示だってカタログだって作ろうと思えばできちゃうんだけど…。でも、そういう伝えたい情報をそのまま全部出しても、何も伝わらないのと一緒だから、それを一般の人に伝えるためには専門的なことを翻訳して伝える人がいると思うんですよ。で、そこで情報を整理してこうやりましようっていうのがたぶん僕らデザイナーの役割であって、だから展示でもグラフィックでもデザイナーっていう人が介在する意味っていうのがあるんじゃないかなと。

山崎：今回お仕事して実感したのは、デザイナーって自己主張が強いのかなくて漠然と思っていたのですが、それは思い込みだったんだなと。あと、そのデザイナーさんのカラーや方向性にそぐわないものを発注しちゃったら失礼になるんじゃないとか、デザイン案に対して、何が良くて悪いのかを判断できる基準を自分の中でしっかりと持てるだろうかとか、正直、最初は不安でした。でも、実際に一緒にお仕事すると、こんなにもこちらの意図を汲んでくださったうえに、自分が想像していた何歩も先のことをやってくださるというか、これがデザイナーっていう仕事なんだなっていうのを間近で見て感じましたね。

大溝：確かに大前提としてはそうなんですよ。ただ、小沼さんの思いを聞いて、じゃあこうした方がいいって出てくるものは僕の中からだし、僕の色が出ちゃうんですよ。

西田：でも、そのカラーが出てくるのが楽しいんですよね。「あ、大溝さんキター」みたいな（笑）

大溝：それぞれのデザイナーから出てくるものは違うから、今回誰に頼もうかっていう見極めは、結構難しいと思うんですよ。誰に頼んだらいいのか決めていくためには、日頃から色んなデザインされたものを見ていくことが大切だろうなと。

みんなで同じ方向を向く

西田：今回の展示って、企画メンバーの専門分野もバラバラなんですよ。小沼さんの気持ちからスタートしていて、小沼さんをサポートする意識は共通しているんですけど、それだけじゃなくて自分事として積極的に展示会をつくっていく意識がそれぞれにあるから楽しかったし、こういうかたちにできたのかなって、ふりかえって思うんですよ。

小西：今回、私はとても仕事がやりやすかったんですけど、それって奈良文化財研究所側のみなさんの仲の良さというか、意思疎通がしっかりとれていることが大きかったように思いますね。例えば、写真を撮影する飯田さんもちゃんと打ち合わせに入っていたから、キャビネットの写真を実物大で使いたいとかいう話も、「じゃあこれくらいのサイズと解像度が必要ですね」って話がその場でできたり、とてもスムーズでした。館側がまとまらない場合、「あとで担当者に話します」って言われて、伝え方次第では意図が伝わらずにずれが生まれてしまうこともあって、デザイナーとしてはづらいですね。

山崎：まとまってないとか露骨に見えるんですね。

小西：担当者に熱い思いはあっても、他の要因からそれは通せないって言われて、そこで永遠に結論が出なくて、でもなんとなく進んでいって、みんながちょっとずつ諦めていってしまう。大溝さんも、こういうこと結構あります？

大溝：あります普通に。小沼さんって自分の思っていることをハッキリ言うっていうじゃないですか。でも、あるとこで仕事しても、その担当者本人が「いいな、好きだな」と思っても、素直に好きって

言わないですよ。個人の意見より、上層部や館の色々な関係者に確認しますって話のほうが多い。で、今回の仕事で良かったと思うのが、小沼さんが組織内の調整もしたうえで「私はこれ好き」とか個人の思いも言ってくれるじゃないですか。だから非常にやりやすいんですよ。僕ら結局デザインするときに一番大事なのは、仕事を頼んでくれた人だし、それでやる気になっているんですよ。だから今回デザイン出すときに一番最初にイメージするのは何かっていうと、小沼さんがおもしろがるか、ビックリするかってことなんですよ。当然、広報物を作るときに、大前提はこれで人が来てくれるかなって考えるけど、そんなのわかんないですよ、はっきりいって。だから、やっぱりまずは担当の窓口の人のことを頭に浮かべてやるんですよ。でも、それが担当者の気持ちが見えない組織だと、僕自身も誰に向けてやってるのかわからなくなるんですよ。そうすると全然うまくいかないし、やる気も起らないし、っていうことは多いんですよ。

西田：強い核みたいなものがきちんとあって、それをブラさないっていうことがやりやすさにつながるんでしょうか。

小西：企画に関わるみんなの覚悟みたいなものが大事だと思いますね。あと、色々な博物館の展示を見て思うのが、客観的な視点が明らかに欠けている場合もあって。単純に誰が読むんだろうっていう文字だらけになってしまっている解説パネルとか、デザインされたチラシでも、あんまり打ち合わせもせず作ったんだろうと感じるような、展示意図と全然違うものになっていたり。でも、そういう「自分たちだけでうまくいけてると思っちゃっていることに気づけてない」っていうのは一般の人來館者にも伝わってしまうと思うんですよ。悪い言い方すれば、独りよがりな展示になってるなって思うのが結構あるんで。そういうときに、デザイナーの手を入れなくても、打ち合わせに外部の人が参加するだけでだいぶ変わるんじゃないかなと思うんです。

西田：展示って色んな人に見てもらうものだから、作る過程でも色んな人と関わることで良くなっていく部分がありますよね。ともすれば、「館内のメンバーですべてやればいいじゃない、手作りでやればいいじゃない」という意見もあるんですけど、やっぱりそれぞれのプロがちゃんとして、そこに依頼

する意味はあると思うんです。あと、展示会をつくる過程で、完全に所内の人間だけでやるんじゃないくて、やっぱりそこで大溝さんのグラフィックのセンスだったり考え方、あるいは私たちの気づいてないことを引き出す力とか、小西さんの空間につくり上げていく力っていうのが加わることで、私たちが楽しいだけじゃなくて色んな人が楽しめて、色んな角度からの発見があるように、結果として展示会で多くの人の心を動かせたのかなって気もするんですよ。

小沼：大溝さんや小西さんも一緒に楽しいって思ったださっていると思うと、私たち所内の人間だけが内輪で盛り上がっているんじゃないとか、きっとたくさんの人にも魅力が伝わるはずだって安心して進められるんですよ。反対に、相談しているなかでちょっと違うんじゃないってなれば、一旦立ち止まって一緒に考えてくださるし、同じ価値観を共有できたから、「骨ものがたり」をどんどん深めていった気がします。

大溝：今回、小沼さん山崎さん飯田さん西田さん、みなさん楽しんでやってるじゃないですか。意外とこんな仕事少ないんですよ。なんかこっちの方が、企画の意図をくみ取るとか寄り添うとかそんな話ではなくて、みなさんが楽しくやっておられるから、こっちも普通に楽しくなるだけの話なんですよ。他の仕事だと、クライアントにも色々な担当者や立場の人がいて、そこがほんとにみんな一枚岩でこれを成功させようと思って一致団結してやってるかっていうと必ずしもそうじゃない場合もあって。そういうなかでの軋轢とか僕らは敏感に感じ取るし、そうなってくるとなかなかうまくいかないんですよ。

西田：そういう意味では、学芸室だけでなく環境考古学研究室の山崎さんを巻き込みながらやってきたことの良さも所内的にもあったかな。主担当が一人で進めると所内外の調整で心が折れてしまいそうになるときもある。今回は方向性や信念を共有できるチームでまとまった強さもあったのかもしれないですね。

大溝：ぼくはずっと思ってたのは文化祭みたいだなって。

一同：（笑）

西田：私たちもおんなじこと言ってた（笑）。

大溝：模擬店の準備してるみたいだなと思いがち。

西田：楽しみのテンション的には、みんなそんな気持ちでいたんですけど、アウトプットのクオリティは、ナショナルセンターとしていいものにしようと思っていましたね。あと、いつも展示をつくることで、時間やお金の都合で諦めるしかないことがあるんですけど、今回は「やりたい！」って誰かが言うのと、「よしやろう！」ってみんな乗っかってるところがあって、結構全部やりきったっていう印象があって。

小沼：最初の案とは違うかたちになっていても、何かしらのかたちで実現できましたよね。

大溝：展示会をつくるとして、原稿は書くけど図録の企画会社に編集も含めて投げちゃって、そういう企画会社がデザイナーに頼んで、きれいに、そつなく時間内にできてくる、そういう作り方もあれば、今回の骨ものがたり展のように学芸員とあーだこうだ言いながらできていく図録や展示もあるんですよ。

小沼：私は、他の人と一緒にキャッチボールしながらチームでつくるのが好きで。今考えると西田さんも山崎さんも飯田さんもそういうタイプだったなって。大溝さんも小西さんもそこを大切にしてください方だったから本当によかったです。

西田：やりたいことが全部できた！



